

審査員講評

■日本画

評 温井 喜央

市展をみせていただき、すばらしい活気があるのに驚いた。完成度は高く、構図、色彩感覚もすばらしい。市展賞「孤高」は 80 号の大作で、モチーフをよく観察され、静かな中にも力強さが表現されている。市長賞「数河獅子」は、構成的にも大変好ましいが、画面全体における強弱を考えられるともっと作品が高まったと思う。奨励賞「古川町平岩」、古川町の風景ですが、非常に温かみがある画面で今後の作品が楽しみです。

評 北平 真由美

今年も作品数が少なく寂しいですが、皆さんそれぞれ気持ちのこもった作品になっていると思います。市展賞の「孤高」は、柔らかく美しい色づかいが目をみはります。どこか悲し気な姿がうまく描かれています。毛並みの質感や、密なところもうまく表現できています。腰のあたりに重みがあると、もっと存在感が出るのではないのでしょうか。市長賞の「数河獅子」は、作者の祭りに対する想いのようなものが伝わってくる作品です。衣装の柄やバックの処理等、装飾性も感じられます。奨励賞の「古川町平岩」は、ほのぼのとした優しい作品です。構図がもうひとつなのと、近景の描写が雑なのは惜しいところです。今後も変わらぬ努力と、情熱を作品に込めていただき、描き続けていってくださることを願いたいものです。

■洋画

評 大澤 三月

コロナからの開放感なのか、全体に明るくのびのびしている印象。絵を描く喜びが伝わって来る。市展賞「お誕生日じゃない日」、大胆な構図の意欲的な大作。ルイス・キャロルの世界に迷い込んだ少女は、作者の心を投影し日常の狭間を覗いているのだろうか。市長賞「晩雪心象」、オリジナリティの高いマチエールで、雪の表現が個性的で大変に美しい作品となっている。

評 戸部 善晴

優秀賞「希望の宙へ」、自分の感じる世界観を構成し、流れる様な動きで、私的空間が表現されている。奨励賞「渡岸寺十一面観音」、描く対象物と会話しながら、心情を色と形で深く表現している。奨励賞「猫は小説より奇なり」、作品としては小品ですが、描かれた猫の想いが、空間の表現で存在感のある作品になっている。

■彫刻

評 森田 一成

市展賞の「炎刻・(生きる)」は、丸太から形状を彫り出し、内側をバーナーで焼いた作品。焼かれた部分から出ている湯気や煙の様な突起物には、ウクライナの国旗色が着色されており、戦争で亡くなった霊を想像させる。焼いた部分と焼いていない部分との対比が良く、メッセージ性の強い作品となっている。市長賞「海の風景」は、海で泳ぐ魚たちを、木材とカラクリの技法を用いて表現した。ハンドルを回すと魚たちがイルカのように泳ぎ、波も立つので舟も揺れる楽しい作品になっている。是非会場でハンドルを回してみてもらいたい。優秀賞の「黒猫のミャーゴ～自由のない生活～」は、木材と樹皮と針金を組み合わせて、威嚇している様にも見える猫を制作した。巻かれた針金と樹皮との組み合わせが斬新で面白い。少し痛々しくも見えるので、動物虐待への想いを感じさせるような作品になっている。

評 松本 弘司

市展賞の「炎刻・(生きる)」は、今、ウクライナで起きている事に心を寄せ、3点で立っている焼けた木の造形から、復興への力強いエネルギーを感じさせます。作者の想いは彼の地へ必ず届きます。市長賞「海の風景」は、動く彫刻(手動)としてのおもしろさが、見る者に新鮮に伝わり、カラクリと彫刻(立体)のコラボレーションとしての存在感があります。優秀賞の「黒猫のミャーゴ～自由のない生活～」は、針金とバネでしめつけられる黒猫の思いが伝わってきます。薄板による猫の表現がおもしろいです。奨励賞の頭部の習作、すなおにつくられていて好感が持てます。同じく「夏野菜」は、それぞれの野菜の表現力は高いのですが、器にそれらを置いただけでは表現として弱く感じます。一度、野菜と器を一木で彫ってみると、新しい世界が見えてくるかもしれません。佳作の2点は、それぞれの世界を表現されていると思いますが、もう一押し見る者にせまってくるモノが欲しいです。それが何なのか考えてみるのも、意味があります。

全体として、作者がそれぞれに一生懸命作られているのを感じ、その姿勢には共感します。

■工芸

評 岩城 隆宏、柿家 正則

今回作品数が少なく、飛び抜けた作品がなく市展賞はありませんでした。

市長賞「和モダン」、作品は大きな作品でまとまりが良く、ていねいな仕事です。優秀賞「青磁釉水指」、陶器類の良さは、造形・施釉・焼成などのいくつかの要素のバランスで決まります。今回、陶芸の受賞作品は、要素の中の釉薬が釉の厚さ、焼成時の熱量、時間、目的に合った焼成方法(R.F)などが、とてもうまく仕上がった作品と言えます。青磁釉となっていますが、使用した陶土が黒いため、均窯手風の趣が出ています。難を言えば、水差しとしての造形要素をもう少し突き詰めれば極上の作品に成ったと思えます。奨励賞「冬の夜の森」、冬げしきを切り取った感じで、好感がもてる作品だと思えます。

近年、出品者の大半が高齢者である現状から見て、特に若い人たちの参加を切に望みたいと思います。全国的にも、物作り全体に関心がなくなっていると思います。回りを見ても、ほとんど日本の製品がなく外国製品があふれています。このままでは後継者も育たないのではと、不安になる現状です。創作活動も年齢は関係なく、共に感性を磨き教養を高める事で、作品のレベルの底上げに努力しなければと考えています。今回出品していただいた皆様、本当にありがとうございました。

■書

評 種谷 柳雪

コロナ禍が一段落し、芸術活動も以前のように戻りつつある中、書けることの喜び、表現できる楽しさを感じて書作されたのではないのでしょうか。市展賞の「杜甫の詩」は、半切の三行作品ですが、縦の流れに加え、安定感のある線で文字を揺らし、表情が豊かです。慌てることなく、自らのリズムを一貫させた見事な作です。優秀賞の「樵徑一章 傳山」は、2×8の三行作品ですが、縦横無尽に筆を走らせ、流れるような動きで躍動感に溢れた作品です。

評 今寺 千景

青年の部は、今年13点の出品がありました。奨励賞の「臨自書告身」は、抱え込むような向勢の字形、はね・払いを緻密に臨書され、力強い作品となりました。隸書「臨曹全碑」は、原碑の特徴をよくとらえ、伸びやかな筆致で端正にまとめられました。「臨蘭亭序」は、2点の出品がありましたが、いずれも行書の用筆法に努力と工夫がみられました。全体的に余白美を意識した調和のとれた作品が多く、慎重で丁寧な取り組み、書美を追求する皆さんの真摯な姿が作品に反映されていました。来年度さらに頑張ってお下さることを期待しています。

■写真

評 北口 秀夫

写真は、自己表現の一つのツールとも言われている。上位入賞作品は、作者の意図した思いがこちらにも熱く伝わってくる作品が入った。市展賞の「伝統行事」は、厳寒の雪中の出初式である。雪が降りしきる厳しい中の行進の様子が伝わって感動を受ける。秀作となった。市長賞の「宝探し」は、峡谷に刺す光芒を、太陽が傾いた時間帯のやわらかい光が一層美しく輝き、絶好のタイミングの秀作である。ただ、もう少しマッチングした題名がなかっただろうか。優秀賞の「夕暮れ時」は、夕暮れの棚田に二人の散歩する人物を配した写真だが、見る側にも夕陽のオレンジ色に包まれた柔らかい光に癒しを感じる。奨励賞の「花魁道中」は、花魁と肩貸し下男の視線が前方を凝視していて強さを感じる。ただ画面の脇役になる遊女見習いが一部切れているのが大変惜しい。写真の原点は記録でもある。「母子」は、警戒心の高いカモシカの親子がそろって写っている。非常に高い生態写真となった。

評 近藤 龍宏

コロナ禍での長い行動制限が終わり、作品制作への意欲があふれる自己表現の伝わる素晴らしい作品が多くみられました。市展賞「伝統行事」は、帽子に雪が降り積もるほどの厳しい天候の中、伝統行事継承への熱意が感じられる作品です。市長賞「宝探し」、下の岩を宝箱に見立てたのか、あるいはこの光芒を探す宝探しなのか、いずれにせよ作者の興奮が伝わります。優秀賞「夕暮れ時」は、黄昏の棚田夕景。シルエットの二人を構図する事で、作品に良いアクセントとなっています。奨励賞の2点は、いずれも一瞬を切り取るフレーミングが魅力的な作品です。

フィルムカメラからデジタルへ表現の幅が大きく広がりました。それと同時にシャッターを押す感覚が薄れていませんか？「一写入魂」私も含めて気合の入った作品づくりを目指しましょう。